

新島襄とジョセフ・ヒコの船 に関する一考察

—快風丸とベルリン号との奇縁—

三 好 彰

はじめに

新島は日本からアメリカへ手紙を出すには彦蔵かブラウンに頼めばよいと父親に手紙で知らせた。彦蔵とは漂流していたところをアメリカ船に救助されてアメリカに渡り、洗礼を受けてジョセフ・ヒコ Joseph Heco となって帰国し、明治時代半ばに浜田銀子と結婚して浜田彦蔵（1837-1897）と名乗った人である。新島はアメリカに行く前からジョセフ・ヒコと面識があったようであり、親しみを込めて書いている。

新島とジョセフ・ヒコが船を介して、不思議な縁でつながっていたことを述べる。

I. ジョセフ・ヒコに手紙の仲介を依頼した新島襄

冒頭で述べたことの繰り返しになるが新島は父親に「アメリカに居る自分に手紙を送るにブラウン牧師か誰かに頼んでもらいたい」として彦蔵に1867年4月11日付で次のような手紙を出した¹⁾。

Mr. シコゾウ or Siko-Zoo

Dear Sir,

Will you send my father's letter to Rev. Mr. [Samuel R.?] Brown or to some other American missionary and let him direct it to me? If you will do it

for me, I will be very much obliged to you.

Your obedient servant

Joseph Nee-Sima

彦蔵をシコゾウと書いているのは「ひ」を「し」と訛る江戸っ子の新島らしくてほほえましいが、この手紙を受け取ったアメリカ人が宛先人不明と見なしたとしても止むを得まい。それはそれとして、この一文から新島はアメリカに渡る前に彦蔵およびブラウン牧師 (Samuel Robbins Brown, 1810-1880) と面識があったと受け取れる。

ブラウン牧師とはアーモストで再会している²⁾ので、それが確認できる。ジョセフ・ヒコについては資料での確認が取れないものの、本稿で述べるように船を介して不思議な縁でつながっていた。

II. ジョセフ・ヒコの略歴

新島が日本を経た元治元年 (西暦 1864 年) 頃までのジョセフ・ヒコの略歴を記す³⁾。

ジョセフ・ヒコは幼名を彦蔵と云い、播磨の国に生まれた。乗っていた船が暴風のために操縦不能となり漂流していたところをアメリカ船に救われて 1851 年初にサンフランシスコに連れて行かれた。その後も紆余曲折があったが 1853 年半ばからサンフランシスコ税関の徴税官だったサンダース (Beverly Chunn Sanders, 1807-1883) の庇護を受けるようになった。そして 1854 年に洗礼を受けジョセフ・ヒコと名乗った。翌年に金融恐慌のためサンダースの会社が倒産し、ジョセフ・ヒコはマコンドレイ社 (Macondray & Co.) で働くようになった。1858 年に日本人として初めてアメリカに帰化した。翌年に日本に帰還しアメリカ公使館 (横浜) 付きの通訳となった。しかし尊皇攘夷の嵐の中ゆえ身の危険を感じて 1861 年 9 月にアメリカに再渡航した。翌年春にリンカーン大統領 (Abraham Lincoln, 1809-1865) から日本領事館の通訳の辞令を受け 10 月に着任した。1863 年秋に領事館を退任し、横浜で商社を営んだ。

帰国後のジョセフ・ヒコは一貫してアメリカ人として活動し、ブラウンを始めとするアメリカ人や西洋人と幅広く交流があった。

Ⅲ. ピース船長と税関監視船 Jefferson Davis 号

ジョセフ・ヒコはサンダースをアメリカでの最大の恩人としたが、サンダースに紹介したのはサンフランシスコの税関監視船アーガス (Argus) 号のピース船長 (William Cooke Pease, 1819-1865) だった。ピース船長は彦蔵の漂流仲間の治作を賄い人にしていたが、そこにもう一人の日本人漂流者が連れて来られた。それが勇之助 (1832-1900) だった。まだ英語がおぼつかない頃の彦蔵だったが、なんとか通訳のようなことをした。そして勇之助もピース船長が面倒を見ることになった。このことの報告を受けたサンダースは彦蔵が気に入り、職員として雇って自宅に住み込ませた。そして学校に通わせるなどの面倒を見た⁴⁾。

なお勇之助は開国した日本が受け入れるようになった漂流者の第一号として帰国した⁵⁾。嘉永7年6月17日 (1854年7月11日) のことだった。

ところで税関監視船 Jefferson Davis 号が1853年末に進水した。翌年の9月28日付でサンフランシスコ北部のワシントン州タウンゼント港の最初の税関監視船になり、ピースが船長になった。ピース船長は Jefferson Davis 号に1856年まで乗った後、一時期オハイオ州で造船の仕事をしたのち再び西海岸に戻り1858年に別の税関監視船 Marcy 号の船長になった⁶⁾。

Jefferson Davis 号は1862年に民間に払い下げられて、商船となり Governor Wallace 号と名を変えた⁷⁾。海軍の帆船は使命を終えて蒸気船へ移る時代であった。

なお Governor Wallace 号の名称は、当時フランクリン・ピアース (Franklin Pierce, 1809-1869) 大統領の下で陸軍長官を務め、後に南部11州が合衆国から脱退して作ったアメリカ連合国の大統領となったジェファソン・デイビス (Jefferson Davis, 1808-1889) にちなんでいる。

IV. Governor Wallace 号に乗ったジョセフ・ヒコ

1862年3月12日にリンカーン大統領から駐日領事館（神奈川）の通訳の辞令を受けたジョセフ・ヒコはサンフランシスコからハワイ経由で上海に渡り、Governor Wallace 号で帰国した。この船のことをヒコは次のように書いている⁸⁾。

二十七日、上海に着いた。ただちに神奈川行きのガバナー・ウォレス号の寝台を確保した。二十九日、呉淞に寄港した。もはや日本向け出航を待つばかりだ。

ジョセフ・ヒコは、ガバナー・ウォレス（Governor Wallace）号がピース船長の Jefferson Davis 号だったことは知らなかっただろう。

ところで『アメリカ彦蔵自伝』はジョセフ・ヒコが書いた草稿をマードック（James Murdoch, 1856-1921）が編纂した英書“*The Narrative of a Japanese*”を邦訳したものだが、ジョセフ・ヒコの草稿に出ているが刊行本が取り上げていない箇所がある。その1例になるが Governor Wallace 号に乗ったという上記の文は刊本では次のようである⁹⁾。

On the 27th we arrived at Shanghai, and I at once secured a berth on board the *Governor Wallace* bound for Kanagawa. On the 29th we dropped down to Woosung, ready to sail for Japan.

ジョセフ・ヒコの草稿¹⁰⁾では次のように詳しく書いている。

Our steamer arrived safely to Shanghai in the 27th of the same month; upon our arrival I hastened ashore in order to find out & there was any vessel up for Japan. On the bund met my old friend who informed me that in a few days schooner “*Gov. Wallace*” would leave for Kanagawa, so I went to the

owner or Agent of the vessel & obtained my passage for above port, & transferred myself from *Rona* to *Gov. W.* the next day, I called on several friends, and on 29th Sept. our vessel dropt down to Wosung, ready to sail for Kanagawa.

(注 dropt は当時使われていた drop の過去形)

それまで乗っていた *Rona* 号から *Gov. Wallace* 号、つまり *Governor Wallace* 号に乗換えて神奈川に向かった。この船に乗せてもらうようにジョセフ・ヒコは *Governor Wallace* 号の保有会社、つまりエージェントに行った。このエージェントについては次項で述べる。

Japan Herald 紙¹¹⁾によると、ジョセフ・ヒコが乗った *Governor Wallace* 号は9月30日に上海を出港し、神奈川港に10月12日に着いた。

V. 備中松山藩の快風丸

Governor Wallace 号を備中松山藩が買い取って快風丸としたことが、勝海舟『海軍歴史二十三(表紙は十九)巻』「船譜」に表1のように書かれている¹²⁾。なお、表1中の横文字は筆者が付記した。

表1 快風丸の諸元

船名	原名	船形	船質	長さ	幅	深さ	噸数	造国
快風丸	ゴーフルノルワラス Governor Wallace	スクネル schooner	木	十七間	三間二尺		百八十	米

造年	造地	受取年月	受取地	價	原主
	新約 New York	文久二年九月十九日 千八百六十二年	横浜	一万四千三百弗	シエヂスミット組合 C. H. Smith

原主、つまり元の持主の「シエヂスミット」は C. H. Smith と読める。上海の商社 Kramer & Co., の C. H. Smith が該当する。ジョセフ・ヒコが *Governor Wallace* 号に乗せてもらうように頼んだエージェントである。

備中松山藩が受取った文久二年九月二十九日は西暦 1862 年 11 月 20 日である。Governor Wallace 号が神奈川（横浜）に着いてからほぼ一月後であった。

そして文久 2 年 11 月 12 日（西暦 1863 年 1 月 1 日）に国許の備中松山藩に回送することになったが、このとき新島が乗船した¹³⁾。新島は 2 年前から軍艦教授所で航海学を学んでいたので、机上の学問を実践に活かす機会として乗船の機会が与えられたわけである。

さてジョセフ・ヒコは幕末に幕府と諸侯が買った外国船 4 隻の船名と購入価格を書いている¹⁴⁾。その 1 隻に the *Wallace* \$14,300 があり、勝海舟の記録¹⁵⁾と同価格である。この船を備中松山藩が買ったとジョセフ・ヒコは書いていない、知らなかったようだ。また自分が乗ったことのあるこの船に新島が乗ったとは思ひもしなかっただろう。

さて新島は快風丸にもう一度乗った。それは箱館に行ったときであり、品川を出航したのは元治元年 3 月 12 日（西暦 1864 年 4 月 17 日）だった。

VI. Governor Wallace 号は税関監視船 Jefferson Davis 号

上述したように Governor Wallace 号は税関監視船 Jefferson Davis 号が民間に払い下げられた船である。図 1 に Jefferson Davis 号の線画を掲げる（アメリカ沿岸警備隊（United States Coast Guard）Historian's Office 蔵）¹⁶⁾。

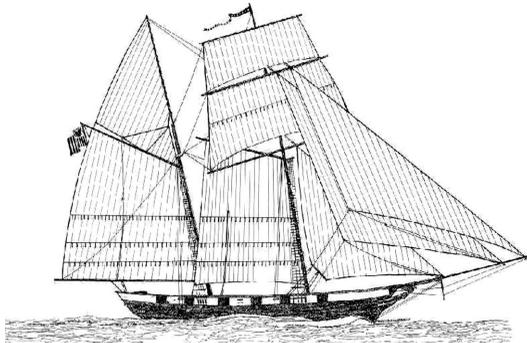


図 1 Jefferson Davis 号の線画

同博物館が公表している Jefferson Davis 号の建造時点のデータを表 1 になぞらえて示すと表 2 のようである。

表 2 Jefferson Davis 号の建造時点の記録

船名	船形	長	幅	深さ
Jefferson Davis	Cushing Class topsail schooner	93ft (28m)	21ft (6.4m)	9ft (2.7m)

噸数	造年	造地	價	武器
160	1853	J. M. Hood, Bristol, Rhode Island	US\$90,000	6×12 pdr (5.4kg) cannons

注：pdr = personal defense rifle

表 1 が和尺で書いてあるのをメートル法に換算し、船形と造地を横文字とし、表 2 の Jefferson Davis 号もメートル法にして両船の主な事項を表 3 に対比して示す。

表 3 快風丸と Jefferson Davis 号の諸元の対比

船名	船形	長	幅	深さ	噸数	造年	造地	價
快風丸	スクネル	30.6m	6.0m		180		新約	\$14,300
Jefferson Davis	Cushing Class topsail schooner	28m	6.4m	2.7m	160	1853	Bristol, Rhode Island	US\$90,000

寸法と噸数が少し違うが、1855 年 5 月に Jefferson Davis 号はシアトル近海で暗礁に乗り上げて損傷を受けた¹⁷⁾ ことがあり、さらに戦争に参戦したのだから無傷ではなかったろうから、民間に払い下げるにあたり修理をしたためと考えられる。

快風丸は製造年を知らずに買っているが、造船されてから足掛け 10 年目の中古品であった。そして造られた時の値段のほぼ 1.5 倍で買っている。

造船場を勝海舟は新約、つまりニューヨークとしているが¹⁸⁾、実際はロードアイランド州だった。エージェントの C. H. Smith が知らなかったようだ。

ところでワシントン州シアトルにある沿岸警備隊博物館に展示されている Jefferson Davis 号の模型を図2に掲げる¹⁹⁾。



図2 Jefferson Davis 号の模型
Photo by Joe Mabel (2009) を改変/
CC-BY-SA-3.0/URL は注 19) に記載



図3 快風丸の模型

図3は同志社大学同志社社史資料センター蔵の快風丸の模型である。設計当初の Jefferson Davis 号(図1と図2)と、それに改造が加えられた船である快風丸(図3)との違いが模型でもよく分かる。

Ⅶ. ベルリン号の旧名ジョセフィン号

元治元年6月14日(西暦1864年7月17日)に新島は箱館からプロシヤ船籍のベルリン号で旅立ったが、この船はアメリカ国籍のジョセフィン号が国籍と船名を変えていたのだ²⁰⁾。

ジョセフ・ヒコは、このジョセフィン号と縁があった。というのはジョセフ・ヒコのサンフランシスコでの勤務先だったマコンドレイ社が荷主となってジョセフィン号が神奈川に来港しており、ここで商社をやっていたジョセフ・ヒコと仕事の上で関係があった。

アメリカの新聞の記事からジョセフィン号が複数回、神奈川に来たことが分かる。その中の 1862 年末の航海の積荷は次のようだ²¹⁾と新聞が伝えている。

Brig Josephine arrived, thirty-five days from Shanghae, via Kanagawa, to Macondray & Co., with 623 bales drills, 375 packages teas, 50 bales silk, 20 boxes tobacco.

この記事はジョセフィン号が神奈川から 35 日掛けてマコンドレイ社の荷物を運んで来たというので神奈川を出たのは 11 月 15 日だったが、23 日と 24 日、さらに 12 月 5 日に南西からの暴風に遭って浸水したほか、中樁と支策に張った帆が破損してしまったと記事が続いている。さらに 12 月 10 日に、またも暴風に遭って船首の斜樁と下桁の帆をやられてしまった。

ジョセフィン号は、その後にプロシヤに売却されてベルリン号と名前を変えた。新島の乗ったベルリン号である。新島はジョセフィン号時代のベルリン号がジョセフ・ヒコの勤めていたマコンドレイ社の荷物を運んでいたとは思いつかなかったことだろう。

VIII. 幕末の国際郵便船

ペリー艦隊が米国本土との間で郵便をやりとりしていたことが知られているが、日本を介してのことではなかった。日本が開国すると各国が日本在住者と郵便をやりとりするようになった。初めの内は民間船に郵便配送を依頼し、本国の港に着いたときに諸国の郵便網につないでいた²²⁾。新島が上海から箱館の福士に英文の手紙²³⁾を出したのが、その例である。

追って諸国は郵船 (mail ship, mail steamer) を運行するようになった。ジョセフ・ヒコが『海外新聞』の創刊号を「元治二年三月十三日イギリス飛脚船此港に入りしを以て左の新聞を得たり」と書き出している、イギリスの郵船が定期的に横浜に来るようになったことを伝えている²⁴⁾。

アメリカからの郵船が日本に来るようになったのは 1867 年である。その

前は民間船が郵便物をアメリカまで運んでアメリカの郵便網に乗せていた。サンフランシスコではこの役目をしていたのがマコンドレイ社であり、神奈川から同社経由で送った手紙が残っている²⁵⁾。ということで新島と家族との郵便連絡に間接的だがジョセフ・ヒコが絡んでいた。なお新島が帰国時に乗った Colorado 号も郵船だった。

明治6年(西暦1873年)に米国との間で日米郵便条約を締結し、欧州向けの郵便物も米国を経由して送られることになった。さらに明治10年2月に万国郵便連合に加盟し、加盟国間は郵便物が原則として同一種類、均一料金になった。現在も、この規則に準じている。

むすび

新島が初めて乗った洋式の船は快風丸だが、この船はアメリカ船籍の Governor Wallace 号を備中松山藩が買い取った船だった。新島に先立ってのことだが、この Governor Wallace 号に乗ってジョセフ・ヒコは上海から神奈川へと帰国していた。新島もジョセフ・ヒコも、相手に乗ったことは知らなかっただろう。

なお Governor Wallace 号は税関監視船 Jefferson Davis 号が民間に払い下げられて、船名が変わったのだが、Jefferson Davis 号の船長だったピースにジョセフ・ヒコが世話になったという縁もあった。

新島が箱館で乗ったベルリン号は、アメリカ船籍のジョセフィン号をプロシャが買い取って船名を変えたのだが、そのジョセフィン号がジョセフ・ヒコの勤めていたマコンドレイ社の荷物を神奈川からサンフランシスコに運んでいたという縁でつながっていた。

新島襄は英語で Joseph Hardy Neesima と名乗った。ジョセフ・ヒコは Joseph Heco なので二人は Joseph 同志である。二人の Joseph は複数の船を介して不思議な縁でつながっていた。

摺筆に当り、Jefferson Davis 号線画の転載の許可をいただいた米国沿岸警備隊・歴史担当官 Scot Price 氏および快風丸模型の写真の転載をいただいた同志社大学同志社社史資料センターに感謝の意を表する。

注

- 1) 「12号書簡」、新島襄編集委員会編『新島襄全集』第6巻 英文書簡編（同朋舎出版、1985年）
 - 2) 新島襄編集委員会編『新島襄全集』第6巻 英文書簡編（同朋舎出版、1985年）、p.52.
 - 3) 中川務・山口修共訳『アメリカ彦蔵自伝2』（平凡社、1964年）、pp.276-283.
 - 4) 中川務・山口修共訳『アメリカ彦蔵自伝1』（平凡社、1964年）、pp.104-108.
 - 5) 河元由美子「勇之助のこと：開国後帰国漂流民第1号（1）」『英学史研究』第39号（日本英学史学会、2007年）、pp.81-95.
 - 6) Kern, Florence, *The United States Revenue Cutters in the Civil War*, (Coast Guard Bicentennial Publication, 1988), pp.11-12.
 - 7) *Polynesian, Three Days Later News*, 24 May 1862, p.2.
 - 8) 中川務・山口修共訳『アメリカ彦蔵自伝1』（平凡社、1964年）、p.274.
 - 9) Heco, Joseph, 『海外新聞』第1号（1865）、p.305.
 - 10) 彦、ジョセフ：*The narrative of a Japanese* ジョセフ彦草稿本第8冊（記述年月不詳）、pp.12-13, 天理図書館蔵（請求記号：210.6-イ 2-8）
- 注釈：『新島研究』第115号への寄稿文に引用する許可を得た。
- 11) *The Japan Herald, Yokohama Shipping Intelligence*, 18th October 1862.
 - 12) 勝海舟『海軍歴史二十三（表紙は十九）巻』「船譜」（1888年）、国立国会図書館蔵（勝海舟関係文書）。
 - 13) 新島襄編集委員会編『新島襄全集』第3巻 書簡編（同朋舎出版、1987年）、p.7.
 - 14) Heco, Joseph; Murdock, James Murdoch, Editor, *The Narrative of a Japanese; what he has seen and the people he has met in the course of the last forty years*, Yokohama Printing & Publishing Co. Ltd., 1865, p.311.
 - 15) 勝海舟『海軍歴史二十三（表紙は十九）巻』「船譜」（1888年）、国立国会図書館蔵（勝海舟関係文書）
 - 16) Web site: <https://media.defense.gov/2016/Sep/27/2001640892/-1/-1/0/240616-G-ZZ999-104.jpg>（2023年9月13日 現在）
 - 17) *Sacramento Daily Union, Accident to U.S. Revenue Cutter*, 29 June 1855, p.3.
 - 18) 勝海舟『海軍歴史二十三（表紙は十九）巻』「船譜」（1888年）、国立国会図書館蔵（勝海舟関係文書）
 - 19) Web site: https://en.wikipedia.org/wiki/USRC_Jefferson_Davis（2023年9月13日 現在）

- 20) 八木谷涼子「セイヴォリー船長と箱館の商人ウィルキー」『新島研究』第111号 (同志社大学同志社社史資料センター、2020年)、pp.101-118.
- 21) *Sacramento Daily Union, Arrivals*, p.3, 19 December 1862.
- 22) Frajola, R. C., Perlman, M. O., Scamp, L. C., *The United States Post Offices in China and Japan*. (New York: The Collectors Club, 2006), p.38.
- 23) 新島襄編集委員会編『新島襄全集』第6巻 英文書簡編 (同朋舎出版、1985年)、p3.
- 24) Heco, Joseph; Murdock, James Murdoch, Editor, *The Narrative of a Japanese; what he has seen and the people he has met in the course of the last forty years*, Yokohama Printing & Publishing Co. Ltd., 1865
- 25) Frajola, R. C., Perlman, M. O., Scamp, L. C., *The United States Post Offices in China and Japan*. (New York: The Collectors Club, 2006), p.38.